幼児の教育　昭和61年8月1日発行(毎月1回1日発行)昭和23年4月15日第三種郵便物認可　第85巻　第8号

幼児の教育 8

1986

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育研究会
61.8.18
教育図書館

第85巻　第8号　日本幼稚園協会

新刊!!

子育てに関わるすべての人々に、深い感動を呼ぶ人間ドキュメンタリー。

重い脳性まひの娘がかえってその母の人生の幅を大きく広げた。母は困難を超えて独力で保育所を作り上げ、子育て・人間・人生について誰よりも深い真理に触れた。この2巻は『障害児の娘と保育の仕事と』の著者が、自らの生い立ちから娘の出産・人生の転換を経て、心身障害療護施設の設立に成功するまでを綴る半生の記録であり、子育てに関わるすべての人々に深い示唆と感動をもたらす人間の記録である。

人形棚の白い靴

——障害児の母となって①——

●著者自身の生い立ちから末娘・友ちゃんの誕生。絶望と不安、障害のある子を育てながらも仕事を続けたいと願う心の揺れ動き。そして、決断。独力で保育所を作り上げる。母として、保母として障害児保育の勉強に意欲をもやす。

ありがとう　ごめんね

——障害児の母となって②——

●友ちゃんの入学。さまざまな障害を持つ子らの発達に応じてなされる教育の現場の姿。そして、友ちゃんの卒業後の生きる場を保障したいという願い。それは、親亡きあとも安心して生活できる場を作る活動へと発展。奔走は実を結び、多くの後援者を得て心身障害療護施設『麦の家』設立に成功する。

高城山保育園園長土屋多喜栄・著　四六判・各巻256頁・定価各1,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

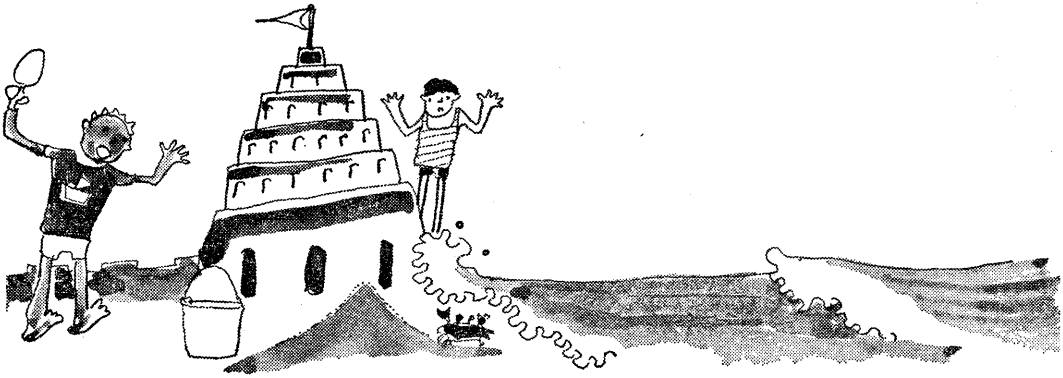
第八十五巻　　第八号

幼児の教育　目次

――第八十五巻　第八号――

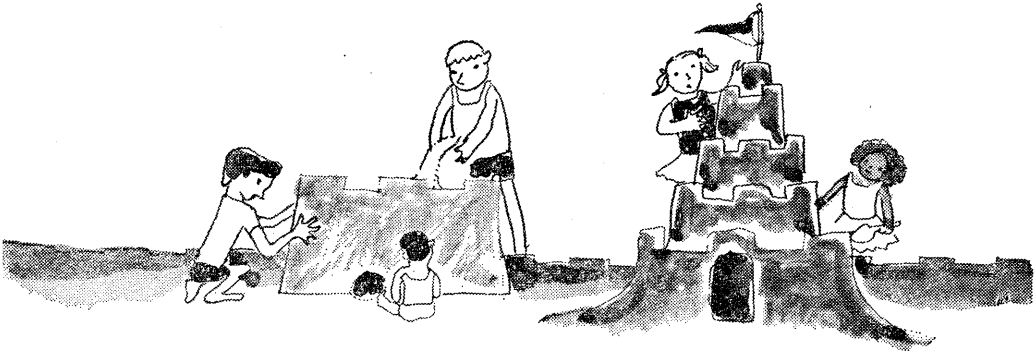
© 1986
日本幼稚園協会

緑蔭図書紹介
「八月六日から一五日」を語りつぐこと……中村　悦子…（4）
ごっこからファンタジーへ、他……村石　京子…（8）
魔法使いのチョコレート・ケーキ……森下みさ子…（13）
「光の小鳥」をつかまえるために……国吉　栄…（18）



SF的読み解き、子どもという風景
第十六回　指の年代記……堀内　守…(26)
子どもの遊び(その4)……E・A・A・フェルメール　浜口順子訳…(36)
「子どもへの愛」の社会学(1)……山田　昌弘…(45)
我が家の朝……はるにれの会　宮里　睦美…(51)
子どもの自己実現と保育者の自己実現……津守　真…(58)

カット・福田　理恵



「八月六日から一五日」を語りつぐこと

中村悦子

八月号の緑蔭図書の紹介の依頼を受けたとき、すぐに浮かんだテーマが、「八月広島」というものでした。八月の広島を訪れていない私にとって、それは年毎に大きくなっています。「ヒロシマは、世界の人びとにとって、もはや単なる地名ではなく平和のシンボルです」といわれる。戦後四十年をへる中で、戦争・原爆の体験は、風化させてはならず戦争反対を含みながら更に進んで平和への希求となって歩み続けられるものでしょう。

そして今、もう一つの面から戦争平和の教育について考えています。それは、絵本のテーマ分類の研究とつながっているのですが、ミシガン州立大学の友人、P・シアンシオロ教授が、子どもの絵本の世界への案内に、四つの入口と領野を示しているのです。つまり、「わたしとわたしの家族」「他の人々」「わたしの住む世界」そこで「想像の世界」と。

その中の一つ「わたしとわたしの家族」というテーマは、「わたしは誰？」という子どもの自己確認の欲求の表れともいえる根源的な問に根ざしています。そして、この問は、「わたし」の確かな成長の確認と、身のまわりの親しい人がわたしを愛しているという自己肯定が育つことの中に深まっていきます。この絵のテーマに描かれているものは、本の中の主人公の経験であっても、それを読むわたしたちに、自分のものと呼応する共通の、意味のあるものとして把えられるでしょう。つまり、普遍的な経験です。

そして、子どもは、もう一面、自分または家族や民族が極めて独自なありようの中で人となっていく、その自己確認の過程を体験します。独自な民俗、文化を生きる人となりを把えるといったらよいでしょうか。そして、それを現代の日本の子どもに即していえば何だろうかと考えました。思案の末、私がたどりついたのが、戦争を語りつぐ伝承と平和を希求し実現する創造とが生み出す民族精神ではないかと思うのです。そこで、この戦争と平和を語りつぐ精神が、子どもの本（絵本）にどのように具体化しているか、関心をもって見始めています。

八月の暑い夏、それは厳しさ故に日本人にとって戦争を考えるに最も適わしい時期です。私のささやかなノートの中から、幾冊かを取りあげてみました。

『親と子のための平和教育』荘司雅子　広島平和文化センター　（500円）

私は最近までこの本を知りませんでした。きっかけは、ＯＭＥＰ（世界幼児教育機構）会議の席で、欧米で幼児の平和教育を語るとき期待の目が日本に注がれるが、資料は意外

に少なく、この著が話題にあげられるとききました。求めに応じて、著者から「押しつけになってもと思って」との伝言と共に贈られたものです。

氏が個人的なヒロシマ体験を越えて、八〇年のヒロシマ宣言の起草委員長となり、この小著をあらわすに至った想いを知ることができます。

＊

「核兵器の恐ろしさは体験した人でなければわからない」と先の著にもありますが、こと戦争・核のことは、再び体験を通して味ってはならないという条件下で伝えられなければなりません。そうしたら、戦争を子どもに語りつぐ、しかも追体験できるようなものとして語りつぐとは、どうしたらよいのでしょう。

その点、絵本は絵画芸術の方法をとって戦争再現の試みのできるものといえるかもしれません。中でも『ひろしまのピカ』（丸木俊・小峰書店）『猫はいきている』（早乙女勝元　田島征三画　理論社）、最近作『りゅう子の白い旗』（新川明　儀間比呂志画　築地書館）には、各々、広島、東京大空襲、沖縄戦の様相が生々しく描かれています。そして三作目を例にとれば、「りゅうきゅうのりゅう子」という一人の少女に即して語ることで、戦火の中の沖縄の子どもの受難を典型的に描き出そうとの意気が伝わります。しかし、再現の試みは、常に事実との乖離もまた生ずるものです。

＊

松谷みよ子氏は、この間のことを次のように書いています。戦争の話をきいてくる宿題

が出たというので、小学校の娘に指が痛くなったというまで書きとらせました。それなのに不満なのです。（略）はっと気がつきました。戦争を語りつぐということは、説明することではないのだ。ともすれば私たちは説明し、教えようとしているのではないでしょうか。実感の重みこそ求められているのに。（略）」（『ぼうさまになったからす』松谷みよ子。司修　偕成社の表紙のことばより）

実感の重みを伝える――本当にそうなのです。この点、松谷の『ぼうさまになったからす』（前掲）は、戦争の描き方の視点が少し異ります。この点は、作者が民話採集の私の中で出合った話をもとにしたものです。「太平洋戦争後終戦直後、烏がいなくなった。シベリアへ行ったと話し合った」『現代民話考』立風書房）と。日本には、烏と死者とをつなぐ俗信があります。そのせいか私も、この話を聞いたとき、はっとするほど鮮明に、死者を弔うメッセージを受けとめたことを覚えています。今次の戦争の中から、口づてに語られ、現代の民話として形成きれるかもしれない貴重な一つです。

これが絵本になり、司修氏のぼうさまに変身していく烏の造形によって、これまでの泣き声に加えて新しい烏像が生み出されたように思います。

（大妻女子大学）

ごっこからファンタジーへ——子どもの想像世界——

内田伸子著（新曜社）

村石京子

著者はお茶の水女子大学教育学科の助教授であり、私どもの附属幼稚園にもよく見えられる方である。先頃、研究のための実験の依頼があって、幼稚園の子どもたちが被験者となることがあった。実験を終えもどってきた子どもに「何をしたの？」と問うとお話つくりということで「金魚のトトのお話をきいて、自分で続きのお話をつくるの」と言ったり、「今聞いたお話をもう一回お話するの」と言ったりしていた。「むずかしいの？」と聞くと、「むずかしくない、面白いよ」「楽しかった、もう一回する」などという感想である。私は実験の内容については詳しくは知らなかったが、幼児が課題された事柄について一生懸命考えていく経験や、自分の頭の中で想像力を精一ぱい駆使したりすることは良い経験だと思っていた。そして出来ればその状況を知ったり、子どもの語る言葉の記録も見たいものと思っていた。それは日頃から子どもたちと接していて、子どもたちは素晴らしい想像世界をもっていると感じることがよくあったからである。

そして実験に加えて学問的理論づけと、研究の積み上げの結果、新しい書が誕生した。読んでみると、私の期待したとおり、子どもの生き生きとした言葉で語られた内容が多く

見られる。「お話つくり」をするときには、幼児でもすでに発端部から進めて、想像世界を生み出し、そして結末へともっていく形で物語を構成していくことが出来ることが、記述されている。

また、私どもの日常生活の中では、言葉情報の理解や記憶、想起の過程において受け手のもつ常識のメカニズムが働いていくので、送り手が伝えたかった意味が充分伝わらなかったり、再生においては省力化されたりすることがよくある。受け手が自分にとっての中心的な情報だけを選択的にとりこんでいくことを「証言」や「噂話」などのわかりやすい事例から述べてあるのも面白い。

また「子どものお話をつくる」過程は、子どもが記憶の中の経験を素材とし、加工し、分解し、修正し、連想し、そして一定のまとまりある想像世界をつくっていく過程を、理論的に分析してある。幼児のつくり出す「ごっこ遊び」や「物語」において、いかに子どもが創造していくかをすじ道をたてて述べている。

子どもが想像の世界を言葉でくみ立てていく能力と原理というものを、子どもの生の言葉と合わせつつ、学問的に解明してあり、興味深く読むことが出来る書である。

子どもの心はこうして育つ

「豊かな感性をはぐくむ」研究会編（世界文化社）

現代は物の豊かさゆえに、かえって感じる心が貧しくなっているとさえいわれている。今、教育の中では〝豊かな感性をもった子どもを育てる〟ということが大きな課題とされている。

この本は、現場の先生方が子どもの心の問題を中心として、子どもの感じる心に目をむけ、その心を大切にして、豊かな感性をもった人間に育つことを願いながらまとめていかれた本である。

私どもの日常の中では、ともすると大人中心のものの考え方や見方によって、小さいけれど大切なことを見落してしまうことがありがちである。子どもの心を豊かに育てたいと思うなら、先ず第一に保育者が子どもの心に気づくことをしなければならない。子どもの気持をくみとり、子どもののぞんでいることを確実に理解し、子どもの心をしっかりと受けとめていくことが根本なのである。

子どもの心の中に芽生えているものに気づかなかったり、摘みとってしまうような大人の言動があったり、押さえてしまうような保育がなされては、子どもの心が豊かに育つことは出来ないであろう。毎日の保育の中では、保育者は何よりも先ず、ひとりひとりの子どもを大切にし、子どもの今現在のぞんでいることを知って、その子どもの気持に合わせた保育をしていくことが大切である。こうした保育、大人とのふれあいがあってこそ、子どもは心豊かな人間に育っていくことが出来るであろう。

保育の場においては、認識や材料の新しさとか珍しさに目を向けるのではなく、自分の

身のまわりのものを自分の目でしっかりと見て、素直に受けとめていく姿勢をもつことが基本となる。日常の身のまわりの現象や自然とのふれあいなどにおいて、変化したり、育ったりすることに気づき、美しさに感動したり、新しい発見に心を打たれたり、喜んだり、あるいは悲しんだりする心をもつこと、これがみずみずしい豊かな感性といえるであろう。

この本を通して、純粋な子どもの心に気づくことの大切さを改めて思い起こすとともに、保育者の適切な言葉かけや、優しい思いやりなどによっても、子どもの心の中で育つものの大きいことを、事例や考察の中から読みとれたことであった。

言葉のしつけ——豊かな言語表現——

日本語シンポジウム（小学館）

最近「日本語が乱れている」とか「新しく言葉がつくられている」などとはよく耳にする言葉である。このことに関しては全く同感と思うことがある。この間ある大学の先生からうかがった話であるが、ある集りに先生に出席してもらいたいといって頼みに来た学生がこう言ったそうである。「枯れ木も山のにぎわいですから、是非先生にも出席して下さい」と。先生はびっくりして返す言葉がなかったと語られた。また最近の「住めば都」という解釈は、若い人たちの間では「住むのなら都がいい」という解釈があるという。こん

な話を聞くと、ついていくのが大へんという気持にさえなってしまう。身近でも若い母親が敬語の使い方を知らなかったりするのに驚いたり、子どもの言葉づかいの荒さを嘆いたりすることがよくあって、言葉のしつけのことに関しては日頃から関心が深い。

この本は朝日新聞社主催、小学館協賛の「日本語シンポジウム」を収録したものである。一部と二部から成り立っており、第一部は「言葉の道しるべ」として大岡信氏の講演が載せてある。言葉の発生、つまり子どもが言語を獲得する営みを根源的なところからみている。その中で子どもの育つ過程と、言葉を身につけていく過程が非常に深く一致しているとある。母と子の関係は、ラブとアタッチメントの関係で成り立っており、言語の習得もここから生まれてくるという。言葉について考えるとき、一番大切なのは人と人との関係であり、言葉の教育は胎児のときからその教育がはじまっているということなど、うなずけるところも多い。

第二部は「言葉のしつけ」という題での当日のシンポジウムの記録である。討論参加者は、青木雨彦、五代利矢子、柴田武、三浦朱門の四氏と西村秀俊氏の司会によって進められている。読みながら会の雰囲気や流れを感じつつ、言葉のしつけの出来ていない子どもや、言葉づかいを知らない若者の現状を嘆くのではなく、自分たち大人世代にもまたかえりみなければならないことがあるのを思って参考になることが多く、また面白く読むのであった。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

あなたへの手紙

「魔法使いのチョコレート・ケーキ」M・マーヒー

森下 みさ子

南に大きく開いた窓に面して、吹き渡ってくるさみどりの風をめいっぱい受けとめ、身も心も緑に染まりながら、今お手紙をしたためています。あなたはあいかわらず、新芽のようにツンツン元気な子どもたちといっしょに、キラキラとまぶしい日々を駆けぬけていることでしょう。もっともこのお手紙が届く頃あなたは夏休み、一呼吸して空っぽの時間をもてあそんでいるかもしれませんね。わたしの方は、長年住み慣れてすっかり気持の通い合っていた古い木の家から、この五月、風致地区というところに越してきました。名前のとおり、あちこちが生まれた風が呼び集まってくるような、四方に風が往き交う街です。引っ越しの荷をほどいていたら、箱につめられて窒息しかかっていた本たちの中から、待ちかねたようにまっ先に外気を呼吸しはじめた一冊がありました。この街にふさわしい、風の魔法のこめられた本……マーガレット・マーヒーのお話集『魔法使いのチョコレート・ケーキ』(福音館書店)です。引っ越しのあいさつを兼ねて、あなたの一人の時

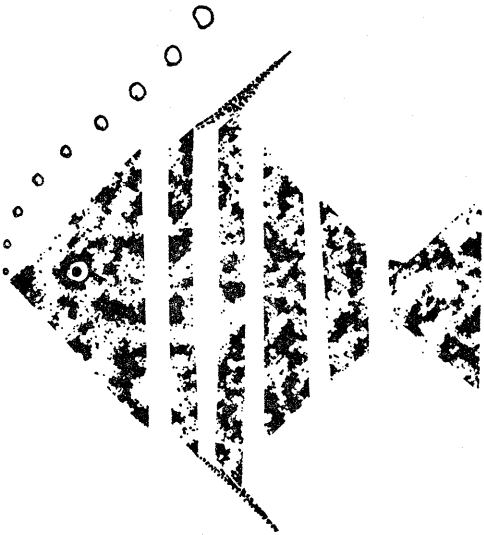
間に、そう、汗ばんだ頬にここちよい真夏の微風のように、このお話をそっと送り届けてみたくなってペンをとりました。

この本には、二つの詩と八つのお話が載せられています。そして、八つのお話全てに風が吹き渡っています。あばれん坊じみた風、いたずらな風、システリアスな風、さやさやとやさしい風、考え深い風、引っ込み思案な風……どの風もが魔力をもっていて、いえ、風そのものが魔法であり不思議なお話の源であるような、これは「風の作品集」なのです。お話はそれぞれに魅力的ですが、一つ一つに寄せるわたしの想いは、今度お会いしたときのわたしたちのおしゃべりの材料にとっておくことにして、今は一番最初に載っているほんとに小さなお話「たこあげ大会」をお届けすることにしましょう。

色あざやかな鳥のようなたこが大空に舞いとぶたこあげ大会の日、ただ一人たこをもたないジョーンは、丘を駆けのぼってゆく子どもたちのしんがりを走っています。手にはかあちゃんにもらった五ペニー銀貨を握りしめて……。そんなジョーンの目に街角に腰かけている一人のおばあさんがとまり、ジョーンは五ペニー銀貨でおばあさんから「夢と願い」のとてもちっちゃな宝の包みを受けとるのです。ジョーンがどんな女の子なのか、ちぢれっ毛なのか、そばかすがあるのか、やせっぽちなのか、何も描かれてはいないけれども、わたしにはわかる気がします。ジョーンは「たこがほしい」とだだをこねてかあちゃんを困らせるほどわがままではなくて、かといって歯をくいしばって耐えてみせるほどがまん強くもなく、たこを作れない不器用な自分を卑下するような自意識もさらさらなく

て、ただ五ペニー分の銀色の幸せと小さな心にポチリとあいたさみしさの穴ぼこをかかえたまま、たこがなくても子どもたちの一番びりを元気に駆けてゆくような子にちがいありません。そのジョーンの心の穴に特別の銀色の鍵をさしこんで、扉の向こう側でいっぱいにふくらんでいる夢と願いを、大空にさあっと広げてくれるのが魔法です。ほんとうに、魔法はこうして起こるのでしょう。何もないところに風がわき起こるように、突然、しかもさりげなく……。うらやみもねたみも気負いもない、ただ消し去りがたい夢と願いが潜かに鼓動している真っ白な心の前に魔法の銀の鍵は置かれ、求めている心はきっとその鍵に気づくことができるのです。ジョーンが他のどの子も気づかなかったおばあさんと夢と願いの文句に目をとめ、「わたしをおとり」と手の中に入ってきた特別な包みを選びとることができたように――。

そのあと、丘にのぼって包みをあけたジョーンに、どんなにすてきなことが起こったか……。ちっぽけな包みはジョーンの小さな胸に秘められた夢と願いをいっぱい



に吸いこんだのでしょう。とても大きなことになって、大喜びでぶつかってきた風を受けとめると、ジョーンを空高くもちあげます。そしてジョーンは、たくさんの緑の花のように広がった丘の向こう側に突然、世界のはてまでも目にするのです。青い草原と一列に並んで突進したり踊ったりしている白い一角獣、それは海とゆれ動く波でした。「夢と願い」「夢と願い」……風の声を残してたこあげ大会の一日は終わり、くたびれた風は「自分だけの秘密のあそび」を楽しむためにとび去ってゆきます。「たこあげ大会はおわったのです」と短いお話は、この短いことばで括られています。

風の魔法には理由も説明もありません。それはふいに起こって、惜しみなく広がり、何事もなかったかのようにツイと消えるのです。空の旅がどんなにすばらしかったか、ジョーンの心にどれほど輝かしい想い出が刻み込まれたか、あれこれ問うのはやめておきましょう。マーヒーは、風の表情や身ぶりを実にみごとに生き生きと描き出すだけで、ここらへんのことについては何一つ説明がましい表現をしていないのですから——。たっぷり遊んだ子どもが、「おもしろかった」とも「楽しかった」ともいう間もなく、くたりと眠ってしまうのに似て、このお話はふっつりと終わるのです。けれども、いえ、だからこそわたしたちはジョーンといっしょに風の魔法を素肌で直かに感じとることができるのではないでしょうか。そしてそのとき、このすばらしい体験はジョーンだけのものできない、日々風となって駆け廻っている子どもたちの、そして時には思いもかけずわたしたちも訪れる、あの天上高く駆けあがってゆくようなわきたつ喜びの体験であることに気づかされる

のです。小さな風たちのそばにいるあなたにはすぐにわかってもらえると思うのですが……。

マーヒーは、湖のように入り込んできている海と、向こうの緑の丘と空だけが見える。世界にこの家ただ一軒という感じの家に住んでいるそうです。そんなところに住んでいたら、ほんとうに自分が世界を吹き渡る風になったような気がするでしょうね。緑と青と白の世界、そこに銀色の滴をたらして吹きぬける風こそは、マーヒーのペンが生みだした魔法なのだと思います。

さて、八つのお話のうちのどの風があなたの心の糸をかき鳴らすでしょうか。またいつかお会いしてお話しいただけますように、その日を心待ちにしています。

五月　　風の到る街のM

小さな風たちに囲まれているあなたへ

（お茶の水女子大学大学院）

「光の小鳥」をつかまえるために
——JKUアニュアル・レポート復刻に際して——

国吉　栄

はじめに

このたび立派に復刻されたJKU（The Kindergarten Union of Japan・日本幼稚園連盟）のアニュアル・レポート（年次報告書）全書を手にして、保育史の資料を夢中になって読んでいた何年か前のことがなつかしく思い出された。

当時私は修士課程の学生で、保育を学ぶ傍ら保育史にも興味を抱き、その類のものを片端から読んでいたが、保育史の第一資料は必ずしも多くはなく、まして私も直接手にすることのできる資料は限られていた。それでも、一つの疑問が次の疑問を生み、それが次の関心へと引き継がれ、興味のつきることはなかった。

私がJKUアニュアル・レポートを初めて手にしたのもその頃である。ようやく手にした数冊のレポートの頁は日に焼けて黄ばんでいた。探していたものを見出した喜びを抑えて、そっと開いた頁から目に飛び込んでできた文字のなんと新鮮であったことか、今でもありありと思い起こすことができる。

そのアニュアル・レポートが、全巻揃って、今、私の前にある。手をつくしても、長い間目にすることができ

なかったレポート。それを今、居ながらにして読むことができるのが信じられない気持である。

未開拓資料JKUアニュアル・レポート

JKUは、幼稚園にかかわりを持つ在日外国人キリスト教婦人宣教師・保育者が集まって、一九〇六年（明治三十九年）に「幼い子どものための仕事を効果的に進めるため、在日外国人保育者が相互に話し合い、連携し合う」[註1]ために結成したのである。その後、彼らの活動の一つの成果ともいえる日本人保育者による「基督教保育連盟」が結成されるに及んで、一九四〇年（昭和十五年）に正式に解散されるまで活動が続けられた。

今回復刻されたアニュアル・レポートは、彼らの保育を伝える実に多くの写真と真に、多彩な記事が掲載され、JKUおよび当時の保育状況を研究するうえで欠くことのできない資料である。ところが残念なことに、このアニュアル・レポートは、その存在こそ知られていたのもの、内容が紹介されたことはほとんどなかったし、実際にそれを読んだことのある人も研究者を含めてごく限られていた。それは、発行母体であるJKU自体についても、未解明の部分が多く残されているということでもある。

日本の保育の歴史においてキリスト教が果たした役割を考察する場合、一般に、婦人宣教師たちの活動が取り上げられる傾向が強い。にもかかわらず彼らの働き自体が十分に吟味されていないとすれば、その評価はいきおい、表面的にならざるを得ないであろう。これは、日本の保育の歴史においてキリスト教が果たした役割を理解する上での当面の障壁であると言わなければならない。

しかし、また一方では、「保育史におけるキリスト教」という点を考える時、宣教師たちの働きに重点を置きすぎることは、逆に、現実理解から離れてしまう危険もある。彼らの働きは、日本および日本人との具体的な関係があってはじめて意味を持つのがあり、おそらく彼ら自身も、そのための努力を積み重ねてきたに違いないのである。例えば明治四年、未だキリスト教禁制下の横浜

に、三人のアメリカ人婦人宣教師によって小さな保育施設が始められた。ただこれだけであるなら、保育の黎明期の一つの出来事にすぎない。しかし、その施設のために募集広告を書いたのが中村正直であったという事実によって、保育史におけるその小さな施設の意味は、俄然大きくなるのである。中村正直（敬孫）は徳川幕府最後の公認の儒者で、明治期の代表的な知識人の一人であるが、明治八年、東京女子師範学校の初代摂理（校長）に任ぜられ、翌九年の附属幼稚園創設に深くかかわったことはよく知られている。そうであれば、日本で最初の幼稚園とされている国立の幼稚園の成立に、今まで考えられていた以上にキリスト教の影響があったのではないか、という推論が生まれる。これを立証していくことによって、キリスト教が日本の保育をつくる上で果たした役割の現実が浮かびあがってくるであろう。また、こうした視点抜きでは、「そういうこともあった」というだけに終わってしまうであろう。宣教師たちが果たした役割の意味を現実に則して評価するためには、一つ一つのことがらの意味をていねいに掘り下げることが是非とも必要である。

ともあれ、一般にキリスト教保育の源泉だと考えられている婦人宣教師の働き、それにしては彼らの働きが十分に検討されてきたとはいえない現実、そのことが、キリスト教が日本の保育に果たした役割に対する評価を通り一遍のものとしたり、薄めたりする一因となるとすれば、如何にも残念であり、また、保育史の全体像をゆがめることにもなろう。この悪循環を断つためにも、この辺で彼らの働きと正面から取り組んでみる必要があるのではないか。今回、基督教保育連盟から復刻されたアニュアル・レポートは、そのための絶好の資料となる。未開拓の資料であるからぜひ大勢の方々が検証に参入し、多彩な研究が進められることを期待したい。

光の小鳥

日本の保育史にキリスト教が果たした役割を正しく位置づけるという大きな仕事は、今後の研究を待つことと

し、今回は、復刻版を読んで得た「小さな発見」を通して、私見の一端を述べさせていただくこととしたい。

何気なくアニュアル・レポートの解説文を読んでいた時のことである。その中の一文に、私はハッとさせられた。それは、小林恵子氏が女優長岡輝子さんの幼稚園時代の思い出を引用されたもので、次のように書かれてあった。「音楽家だったタッピング先生は、色々な曲を弾いて子供達を思い思いに走らせたり静かに歩かせたり眠らせたりした。お天気のいい日はクリスタルの棒を日光に反射させて部屋中をチラチラ光らせ、それを私達は『光りの鳥』と呼んでつかまえようとするのだが、そんな時、先生は必ずピアノのキーをたたいた」(註2)——。

私はこれを読んで大変驚いた。実は以前にこれと全く全じ保育の実践例を読んだことがあったからである。それが載っていたのは、九十年も前のアメリカの保育雑誌"Kindergarten Magazine"(註3)である。プリズムを使った"Light Bird"という名のこの保育例を、拙訳で紹介してみよう。

「子どもたちが床に車座になっているところに、プリズムで壁に七色の光のスポットを写し出してみました。子どもたちは息をひそめて光を見つめ、私たちが歌う小鳥の歌を聴いています。突然小鳥が飛び上がって、円陣のまん中の床にとまります。子どもたちが一斉にかけ寄って手を伸ばすと、ほら手の上に。また飛んで、子どもたちの頭や肩に。子どもたちは沸きに沸き、駆けまわったり、跳んだり、叫んだり。小鳥はまた高い壁にとまり、子どもたちの手は届きません。また床近くに降りてきた小鳥のあとを子どもたちがついていくと、小鳥はフッと消えてしまい。子どもたちは息をのんでもとの位置に座りました」——。

驚いたのがおわかりいただけたであろうか。アメリカのこの実践は一八九六年(明治二十九年)に現場報告として出されたものであるのに対し、日本での実践は、ミセス・タッピングの盛岡時代のことであるから明治四十年代のものであるが、彼女が来日し、幼稚園を始めたのは、JKUレポートによれば一八九五年(註4)であるから、両

者はほぼ同時代の保育といってよいだろう。アメリカの実践例の保育者はミセス・ルバフ (Mrs. H. J. Lebeut) という婦人である。この類似はどこから来たのであろうか。私はミセス・タッピングが保育者としての訓練をどこで受けたか未だ調べていないが、その点でミセス・ルバフとのつながりがあるのだろうか。あるいは彼女はその雑誌を読んだことがあったのだろうか。そうだとすれば、ミセス・ルバフの保育に共鳴するものがあったということであろう。あるいは、太平洋を隔てて、両者独自の実践が行われたのだろうか。いずれにせよ、同じような保育が、同じような時期に、アメリカと日本という離れた地でなされたという事実は、楽しくもまた興味深い。長岡さんの思い出のごとくに、ミセス・タッピングのこの保育が日本の子どもの心に深い印象を残したように、アメリカの保育もまた、アメリカの子どもたちの心に思い出を作ったことであろう。こんな小さな例ではあるが、そこに、アメリカの片田舎の小さな幼稚園と、盛岡という日本の一地方に初めて開かれた幼稚園との連環を確かに感じることができる。

ミセス・ルバフの保育

ミセス・タッピングの保育を知る手がかりとして、ミセス・ルバフの保育をもう少し紹介してみよう。

彼女の幼稚園は、ロサンゼルスの東南およそ三十マイルほどにあるオレンジ・カウンティー、サンタアナの郊外にあったらしい。現在はロサンゼルスの有産階級が住む豊かで美しい町になっているが、当時はまだ住居もまばらな新開地であり、彼女の幼稚園がオレンジ・カウンティーにとっても初めての幼稚園であった。しかし、一八七八年、八〇年と続いてサンフランシスコに二つ、八五年にはロサンゼルスに一つの幼稚園協会が発足しており、「幼稚園運動」という点からみれば、重要な地域の一つに位置していたといえる。

彼女の保育の記録には、織紙、刺紙、縫紙、図画法など、恩物の報告もあり、よく用いられている様子がうかがわれる。けれども、例えば刺紙では、できるだけ目を

疲れさせないように、太くはっきりした線で描いた最も単純な絵を用意する、織紙には50×60センチ大のアート紙を用いる（通常は10センチ四方の色紙が用いられていた）など、工夫がみられる。また、四人ずつのグループで一つのマットを織るなど、小さい紙を一人で扱うのではなく、大きな紙を使って共同で作業する方法を採っている。さらに、恩物を保育の実情に合わせて柔軟に変化させるだけでなく、恩物で用いたテーマを繰り返し各種の方法によって現表することも行われている。その一例が「虹づくり」である。それは、「カリフォルニア名物の虹をテーブルにレンズ豆を並べて作る。黒板にチョークで描く。カードに色鉛筆で描く。さらにはアート紙を細く切って鎖にしたもので部屋いっぱいにかかる虹を作り、机で足場を作って釘を打ち、それに虹をかけて子どもたちがピンで止める」というものであるが、独創的なのは、暗くした窓から一すじの光線が入る位置の床に、水で虹を描いたことであろう。床に水で虹を描くという展開をみせるに至って、「虹づくり」はすっかり恩物ないしは製作とは離れて（しかし、宇宙の統一を知るという面ではより本来の恩物へと戻って）、生き生きとしたものになっている。

そして続いて紹介されているのが、先に挙げた「光の小鳥」なのである。彼女は「光の小鳥」をした後、「魔法のガラス」を子どもたちにさわらせて現象を確かめさせている。子どもたち一人ひとりが、水と定規を使って屈折の効果を試してみる。そして黒板にカラーチョークでプリズムを通る光線を描くという作業が加えられている。ここに見られるような経験を通した学習は、後の教育の基本的な考えであるが、それがカリキュラム化される以前に、すでにこのように実践されていることは興味深い。

この記録が書かれた一八九六年は、スタンレー・ホールが幼稚園教育における新旧の流れを背景に、新しい教育理論を組み立てる基礎資料を得るため、子どもの発達に関するアンケートを全米の幼児教育関係者に配布した年である。IKU (International Kindergarten Union・

万国幼稚園連盟）年報にはそれに対する反応が報告されている[註5]が、サンフランシスコからは次のような文が寄せられている。

「当地での児童研究は流行の域を脱し、真剣に取り組まれるものとなっています」「これらの方法は、学生たちがフレーベルの原理を生き生きと把握し、また、彼の方法を機械的に用いるのを避けるのに大いに効果があるように思われます」――。

これらのことを考えると、カリフォルニアのこの幼稚園の輪郭がかなりはっきりと見えてくる。それは、受け売りの理論を黙々と実行に移すのではなく、新しい風にも窓を開けつつ、現実の子どもに対応して変化する流動的な保育である。決して、保守主義と呼ばれるような保育ではない。そして、太平洋を隔てて、時を同じくして「光の小鳥」を展開したミセス・タッピングの保育にもまた、同様のことが言えるのではないかと、私は思うのである。

ＪＫＵ創立当時の保育者たち

ミセス・タッピングの日本での最初の仕事は、近隣の外国人に頼まれて自宅を開放し、彼らの子どもたちの保育をしたことであった[註6]。まもなく彼女を手伝うためにバプテスト・ミッションから二人の若い婦人がやってきて、彼女のもとで二年間保育を学んだ。そのうちの一人ミス・ファイクは四谷彰栄幼稚園（現彰栄幼稚園）を始め、もう一人は、ミセス・タッピングが彼女の「英語による幼稚園」を「日本人のための幼稚園」に転換した時に、その責任者となった。この人は後に初代副会長、次年度の会長となったミス・ロールマンである。彼女は、ミセス・タッピングの幼稚園を引き継いだ後、休暇をとって帰国し、ニューヨーク州オルバニー州立師範学校の幼稚園教師養成所で学び、一九〇五年に卒業している。ＩＫＵ結成後のアメリカで大いに刺激を受けたことであろう。再来日後、早速、ミス・ハウと共に在日外国人宣教師たちに働きかけて、ＪＫＵ結成へのかじ取りをした[註7]ことがうかがわれる。ＪＫＵの創立集会は、ミス・ロー

ルマン再来日の翌年、一九〇六年のことであった。

このミス・ロールマンと、よく知られているＪＫＵ初代会長ミス・ハウ、会計ミス・クックらのことを考え併せると、ＪＫＵの指導者たちによって日本に入ってきたのは、巷間に批判されるような〝硬直したフレーベル主義保育〟ではなかったと判断できる。また、伝道一本やりの宣教師の集まりでもなかった。ＪＫＵの指導者たちは、専門の教育を受け、生きた幼児の教育に意欲を持つ保育者たちだったのである。ＪＫＵは、そこから出発した。

おわりに

「光の小鳥」をつかまえようとして、私は少し跳びはねた推論を展開したかもしれない。けれども、保育史にプリズムの光を当てること、それはぜひとも必要なことである。一つの方角からの平板な像ではなく、変化球であってもかまわない、七色の光を当てることが、今、歴史を掘り起こす方法なのだと思う。そこに、生き生きとした光の像が結ばれる。

（立教女学院短期大学附属愛児研究所天使園）

註

1 ＪＫＵ規約第2条　復刻版7巻11頁

2 小林恵子「婦人宣教師の幼児保育への貢献」　復刻版7巻405頁

3 Helen Joslin Lebeuf: Homely But Happy Kindergarten Ways. Kindergarten Magazine Vol. IX-No. 2. Oct. 1896.

4 First Annual Report of the Japan kindergarten Union. p. 15.

5 Report of Second Annual Meeting of the International Kindergarten Union. 1897.

6 First Annual Report. p. 15.

7 Tenth Annual Report. p. 3,

SF的読み解き
子どもという風景

第十六回　指の年代記

堀内　守

ユビに足りない

本当は「ユビ」という発言はかなりむずかしいのだ。何ならためしてみるとよい。「ユ」にしても、「ビ」にしても、きちんと言い切らなければならない。これが重なる。

当然「ユビ」という音はきつく響くのである。だから、たいていの人は、「ユビ」という音にしかるべき色あいを加え、きつさを和らげている。子どもが「ユビ」と言い切る代わりに、「ユービ」と伸ばしてみたり、「ユンビ」と変調させたり、「おユビ」と三音にして

いるのにはそれなりの理由がある。

『枕草子』のなかで清少納言が子どもが何かをつまんで見せたのを「小さきおよびもて」と表現しているのも面白い。「指」は「オヨビ」だったのである。

指の表情にはさまざまなものがある。指との戯れは時の彼方に霞んでしまっているが、ことばをおぼえる以前に人はだれでも自分の指と戯れたに違いない。こんなに身近にあるふしぎな玩具。しかもただの玩具ではなく、意のままに動き、形をつくる。

はじめての世界。はじめての世界を形づくる入口は、たぶん口だ。口で触れるものが最初の世界であろう。それに、もうひとつ。排泄の器官。これもはじめての世界とつながっている。

考えてみれば、「肛門」という「門」は、みごとな命名なのだ。本当に。一方は「入口」で、他方は「出口」。双方に「口」があるのもふしぎに思えてくる。いや、別の面から見れば、双方とも世界への「開口部」ともいえる。

指は、このような考えられたままの「開口部」ではない。はじめはうまく動かないからである。たぶん、指がまっとうに動き出すには、ある手がかりが必要なのであろう。生まれたとき、すでに世界への開口部として開かれている口がモノをいう。つまり、口が活発に動いて、指を自分のものと感じとらせるのである。

その辺の機微を寸劇風に表現すると、こんなぐあいになるのではなかろうか——。

乳児の身体は、まだ運動という面においては活発ではない。まだ重い。自分で自分の手や指を動かすまでには時間がかかる。

やがて——

神経がこの重き身体を少しずつ軽くさせるだろう。あるとき、乳児は向うに何か動くものを見る。何だろう。

それを確かめる手だてとして彼に与えられているのは、それまで活発に働いている口だけである。だから、口をそれに近づけるように——見かけ上では彼は手を口に近づける——する。何と、それは自分の身体の一部だ

ったのだ。

こんなぐあいにして、口がそれを自分の手であると教えてくれる。もはや、遠慮はいらなくなる。このひとときの経験がきっかけになって、手は自分の領分を広げはじめる。

こういうシナリオは、ちょっとした話題をもとにして一つの大きなドラマをつくり出す。現象学という手法がそれである。でも「学」という字がつくと、人はとたんに緊張し、かしこまる。が、それは必要ない。現象学は、もちろん学問だからそれ固有の概念をもっているが、やたらに威張り散らす学問とは違うからである。何よりもしなやかなのがよろしい。

指の姿態

つまり、現象学という学問は、カミシモを着てはいないのである。ふだん着の、生活の匂いのする学問だ。もっとも、生活の匂いなどというと、この国ではすぐにコロッと参ってしまうような伝統もある。論理などいらないというように。だから誤解のないように念を押しておこう。生活とはさまざまなできごとの複合体である。一筋縄では解けない。これを丹念に解こうというのだから、せっかちな人には向いていない。せっかちな学問というものもある。バッサリと大なたをふるって、わかったようなつもりになるのがそれである。そこから見ると、「生活」なんてものは次元が低いのだそうだ。

しかし、本当のはなし、あの「開口部」をまっとうに見ている人は生きた現象学者になっている。

乳児が何を食べたか、何を排泄したかまでをいちいち気にして見ているからである。現象学の中心概念である「志向性」も、このような場面に引きつけて考えるとまことにわかり易い。

その延長上で考えよう。指はある時から「指す」ことをおぼえる。これは大切なはたらきである。つまむ、つかむこと、感ずることも手の大切なはたらきだが、「指すこと」はもっと大切である。

「指すこと」によって、ナマの場面が一つの構造にまと

めあげられる。ばらばらなところに、一つのカタチが現われはじめる。

「あれなーに」「これなーに」と、他のものに向かう指。それはまるでレーザー光線が出ているかのように、「あれ」や「これ」を選びとり、それのナマエを呼び出すからである。

そのうちに、指が指に向かう。自分が自分に向かうのである。こうなると、あたかも人間が自分自身に向かって「人間とは何であるか」と問うているのに似て、まっとうな意味における「反省」に近づく。ふつう「反省」というと、道徳的な脈絡で考えられがちであるが、ここにいう「反省」は、ことばどおり自分にはねかえってくることを指す。

さて、この「指す」である。

もともとは、「あれなーに」とか「これなーに」のごとく、具体的に指で何かを指すことであった。それが、具体性をふり落していき、いつのまにかAはBを指すというような一般的な意味を獲得してしまったのである。

こういう飛躍は徐々に起っていく。

指折り数えて数字をおぼえ、数という概念を理解していく過程がある。やがて、指を折らなくとも数の概念を使用できるようになる。

それと同じである。

「指」は「指す」という多様な意味をもった動詞に変身するなかで、格段に広い世界をつくり出した。

オヤユビ

それにしても、手の指はなぜ五本あるのだろうか。

これに対するまっとうな答えはまだ見つかっていないようである。ともあれ、オヤユビが他の指と向かい合っていて、オヤユビ、ヒトサシユビ、ナカユビがそれぞれ独立に動くのは人間だけであるらしい。わかり易く言えば、三本の指で何かを「つかむ」ことができるのは人間だけなのだ。

微笑ましい。「つまみ食い」ができるのはすばらしいことなのだから。

ユビの名前は働きとは結びついていない。「オヤユビ」が「コユビ」を生んだり、育てたりするわけではないからである。しかし、この命名はなかなかうまくできている。「大ユビ」と「小ユビ」が対になっているのであろう。これを「親ユビ」と「子ユビ」と連想させるのは音韻論からも説明できる。そういうメカニズムがある。「ナカユビ」もまずは妥当というべきである。

「人指し指」は、さきに説明したとおりである。「クスリユビ」は断じて子どもの領分のものではない。その名前だけがオトナの世界の――それもいまでは喪われた――ものであろう。

これらの名前をおぼえることで、子どもの指は活発に動き出す。記号が身体を軽やかにするよい例である。

遊戯

平たく言えば、あの遊戯のことである。

「あそび」一般を指す遊戯ではない。子どもの領分のできごとと見なされている「おゆうぎ」のことである。リズム、メロディ、ハーモニィと身体の動きが連動する。このとき手や指は複雑な表現活動をする。

手や指の動きがなくては子どもの世界は貧しい。記号学者や哲学者、修辞学者や小説家はどうしてこのような世界に眼を向けないのだろうか。たいていの理論は、この世界でテストに耐えられるかどうか。もしそこでテストに耐えられれば相当の理論ということができよう。もしテストに耐えられなかったら、その理論の有効範囲はある特定の条件下に限られるということになる。

指の節

指が曲がる。指折り数える。

てのひらの部分を眺めよう。指の曲がる部分は複雑な線が見え、いろいろな紋様をなしている。この紋様と戯れるのも楽しいことである。運命を占う人さえいるのだから。

手の甲の方はどうだろう。ツメの形。ツメの紋様、甲の上に浮きあがって見える静脈。それも身体の調子に応

じて色あいを変える。

ここを通り過ぎていく傷やケガは、人生にはつきものである。

指を組み合わせる遊び。影絵、形づくり、あやとり、その他もろもろ。

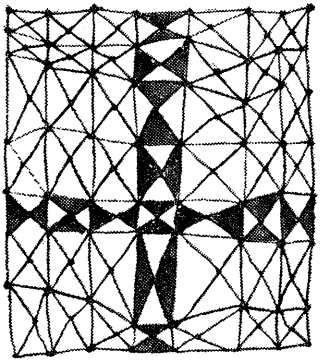
機嫌よき時の手や指の動き。それは仕草となってある意味を発信しはじめる。

関節をポキポキいわせることは子どもにはできない。オトナだけがやってみせてくれる。

こういうことからオトナに対する目つきが変わり出すわけだ。差異がわかってくる。要するに「ちがいが分かる」ということである。

指を揃え、まっすぐに伸ばす。それはあらたまった場面でのできごとである。

「キヲツケ！」「マエヘナラエ！」の号令に応じ、手の指は緊張状態に入る。あるいは「手ヲアゲテ！」では何通りもの挙げ方がある。これを「挙手」として一括してしまってはもったいない。なぜなら、十人十色の挙げ方



が、それぞれ違った意味を発信しているのだから。

手すさび。手で遊ぶ。緊張状態のなかでも起こることである。もじもじと指を動かすことで、緊張状態がしだいに崩れはじめる。それは、沈黙のなかに生ずるひそひそばなしに似ていて、それ自体は小さくとも、合体すれば大きな力を発揮する。

手くせと指くせ

その対極にあるのが「手くせ」。

本来は平凡な意味だったのであろう。しかし、いつのまにか「手くせ」は悪い意味で用いられるようになってしまった。「手くせがよい」とは言わないで、もっぱら「手くせが悪い」ということになってしまった。

意味がきわどくなったのである。

指をなめる子がいる。すると、「不潔でいけない」ことと見なされる。あるいは「心理的に不安だから指をなめるのだ」なんて説明がなされる。どうも平板な説明だ。納得しかねる。

左右の手の指を組み合わせて遊ぶことは、感覚をたしかめ、感覚の錯覚を体験し、いろいろなカタチを眺めることなどの複合した面白い遊びなのである。「手すさび」の意味の広がりは想像以上に広いものだが、それも「手くせ」と切れてはいない。どこかでつながっているはずである。「手くせ」が洗練されて、あるいは修正されて、「芸」に達することだってあるのだから。

まずはふつうの場面で眺めてみよう。

「手くせ」が個性的なあらわれをするのは驚いた時、うれしかった時、不安になった時などである。「はずかしかった時」というのをぜひ加えるべきだろう。このとき、手も指もぎごちなく動く。その場にいたたまれないのは身体ばかりではない。顔がほてるばかりでもない。何よりも指が敏感に動くのがわかる。子どもの場合は、余分な儀礼がないだけに率直に出る。

「指くせ」(「指ぐせ」とにごるべきだろうか)ということばはないようだが、こういうことばをつくり出したくなるほど、子どもの指の動きには個性がある。ひとりひと

りの子どもの指の動かし方が問題なのではない。そんなことよりも、一見たどたどしく思えるような挙手のしかたに共通の意図が籠められているようなのだ。おずおずと挙げる。それは相手との交信のなかで意味を発信し出す。あるいはあや取りの時の指の動かし方。これはおとなが及びもつかぬ柔軟さを発揮する。

試みにオヤ指をそらせてみよう。そのそり方はふしぎなほどみごとな曲線を示すことだろう。

指によるゲーム

幼ない子どもが腕組みをしている。それだけで奇妙に見える。額に手を当てて考え込んでいるふりをする。それもどこかこっけいである。そのしぐさが真剣であればあるほど笑いを誘発するだろう。

合掌し、柏手を打つ。それもマネからはじまる。柏手は手と手の感触をたしかめているのに似ている。

「手」や「指」にまつわる呼び名は、思いがけない言語ゲームに子どもを惹き込んでいく。「テ」は、「オテテ」と三字になる。ちようど「メ」が「オメメ」になるのと同じように。「テ」だけでは調子が出ない。これを三字にしてはじめて拍子がとれるようになるわけだ。

「オテテ」「オミミ」「オカオ」「オナカ」「オヘソ」「アタマ」「カラダ」「ココロ」……などは偶然の言い方とは思えない。後になって、「手」とか「耳」とか言えるようになる前にはこうした拍子が必要なのである。

手をにぎったり、開いたり、指を折ったり、開いたり、また腕を上下に動かしたりすることも拍手とともになされる。号令よりも拍子の方が子どもには合うのである。そのため、子どもに向かう場合には号令そのものが音楽的な変形を受ける。

行進するとき、手の指はどうなっているだろうか。ふつうは指を伸ばして歩く。もしこれを堅くにぎった形で歩かせたとしたらどうなるだろうか。

おとなの場合も歩調がぎくしゃくしてくる。子どもの場合にはもっと顕著な結果が出てくる。もはやぎくしゃくというような段階をこえてしまい、歩調はやたらに力

む形になる。

指の歌

指をうたった歌はなんと多いことだろう。オヤユビからコユビを擬人化し、家族にたとえている歌詞がある。その点においては指はまことに変幻自在である。だが、「指すこと」についてのべたときに指摘したことだが、歌詞のなかに直接指があらわれなくとも、大ていの歌詞の意味は手や指のしぐさとともに意味を増す。

指は、念を押し、盛りあげ、鎮静させ、訴えることもできるのである。

「てんてんてんまりてんてまり」

右の歌詞を例にとれば、これだけの部分をうたうのは手は何回か「てまり」をつく格好をするはずである。もちろん、そういう格好をしなくともうたえるのだが、軽く手を動かすだけで拍子はとれる。そして身体全体をそれと連動させることによって、子どもはしかるべく拍子をとれるようになる。

「むすんでひらいて」は、これらを総合したような歌である。一見きわめて素朴であるが、歌詞が子どもの身体リズムによく合う。曲の方はフランスの民謡から来ている。あの十八世紀のジャン・ジャック＝ルソーが採譜したと言われている。日本にはアメリカを経由して入ってきた。明治十四年には柴田清熙（きよてる）が『古今集』の「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」を念頭において、「見わたせば、青やなぎ、花桜、こきまぜて、みやこには、道もせに、春の錦をぞ……」という歌詞をつけた。

この歌詞に出てくる「都」は東京ではなかった。京都を指した。

何も奇を衒（てら）ってこんなことを指摘（おっとここにも「指」が出てきた）したのではない。そんなことよりも、この古風とも見える歌詞のなかにも拍子によって切り分けられる切れ目がうかがえること、当然それは「遊戯」を予想した「保育唱歌」だったということを指摘したいからである。

「保育唱歌」というのは明治の初年にそういう呼び名ができていた。明治十一年に東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学の前身）で新しい時代の子どもにうたわせる唱歌教材の作成が発案された。それを受けて宮内省式部寮雅楽課がつくった一連の唱歌を指して「保育唱歌」と呼んだのである。それは印刷されなかったので、今日復元できるものは少ない。

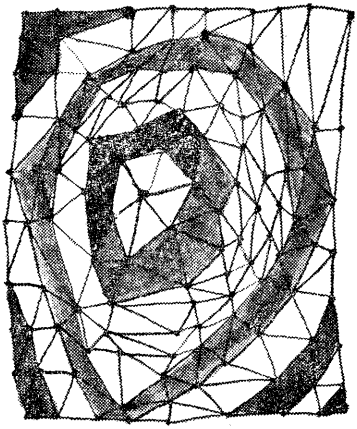
幸いなことに、金田一春彦・安西愛子編の『日本の唱歌（上）』（講談社文庫）の巻頭に「保育唱歌」百余曲中の筆頭の歌が収録されている。作詞者は不詳だが、「風車」と題する歌詞には苦心のあとがにじみでているようだ。

「かざぐるま。風のまにまに、巡るなり。やまず巡るも、やまず巡るも」

こんなに短い歌詞のなかにも手や指の動きが感じとれる。表現活動としてこれを見直してみるときに、手は自然と動き出す。拍子をとり、空中に見えない図柄を描こうとする。

小さな指揮者になったかのように。

（名古屋大学）



子供の遊び（その4）

第三章　自然と文化の間（B）

E・A・A・フェルメール
浜口　順子訳

（一）遊びと児童文化

子供がいかにして遊びの中にルールや習慣を取り入れるのか、そしてこの事にどういう意味があるのかという問題から始めよう①。文化的世界における伝統的な諸形式と同様に、遊びにも遊び的伝統とでもいうべき遊びの諸形式が―大人のマネをしながら―保持されているのだろうか。日常生活において子供は習慣やルールの基準を絶えず習得し、自分の行動および時間さえをも統制・分化しようとしている。こうした共同社会で受容されている秩序の諸形式に自らを適応させるのだ。これに並行して遊びの諸形式というものが実在し、子供はそれに適応している。たとえば数人が歌に合わせて輪になって回るような遊びでは、規則性や反復が大変重要な役割を果たしている。こうしたものは年長の子供たちから引き継がれるが、引き継がれた側の子供たちにもやがて、この遊

び形式を年少の者たちへと伝える番がまわってくる。児童文化や子供の伝統と呼び得るものは、この結果なのである②。遊び形式の保存はこの過程においてこそ明らかとなるのだし、そこに遊び形式は内在している。ところでこの遊び形式の継承は、大人の世界で見たことの模倣、あるいは服従として行なわれるのかどうか考えていこう。

私たちの知る限り、繰り返し起こる出来事や習慣を含んだ日常生活は、子供が生きて遊ぶ際の背景を構成している③。習慣はたしかに安全性、つまり遊ぶ自由のための条件を創出しているが、だからといって習慣がそれ自体で安全なものだということはできない。たとえば遊びを存続させるものとしての「驚き」は、伝統自体とは共存し得ないものだからだ。遊ぶ自由についてまず問うのがやはり妥当であろう。子供が自らの形式付与やイメージ像を喚起するのは、習慣・伝統によってではなく、遊ぶ自由と共存しているがためだからである。他の人のすることをマネする時、こままわし、石けり、ビー玉遊びなどの特徴的な遊びの仲間に入れてもらう時、やはり主体的な形式付与を生みだす自由がそこにあると言えるのだろうか。ブリューゲルの絵（子供の遊び）を見ると、何よりもまず目にとびこんでくるのは伝統的要素であり、当時遊ばれていた多くの遊びが彷彿とよみがえってくる。その上、馬とび、輪になって一緒に回る遊び、なわとび歌、言葉遊びなどを見ると、習慣やルールの上に、ある固定性が保持されていることに気づく。思うままに動いてイメージ像を即興的に創り出す遊び的循環性運動④とは、著しく違うものだ。

伝統的形式を子供が保持していると考えるのは正しくない。秩序やルールの保持には親たちが先んじているからである。ルールは反復性と様々に連関し合っている。すでに述べたように反復性は、例えば遊びのダイナミクスに属している⑤。しかしそれとは別に、遊びには硬直的な反復も現れるのであって、これを模倣とは区別しなければならない。この強迫的な反復を判別するには、自然的な生の領域を省察しなおす必要がある。その際見出

だされる反復衝動は、フロイトが保守的な欲動だとするものだ⑥。つまり反復衝動は欲動的傾向と無縁ではないので、反復と保持を伴う遊びはルール、習慣、伝統などによって親から子へ伝えられる文化的影響ばかりを受けているわけではない。そうするとそれは多分ブリューゲルが私たちに示している通りのものなのだろうか。そこの「子供たち」はいろいろな形式の遊びを通して、自分たちの自然的本性も露わに表現している。「汚ならしい頭と粗野な顔をした獣たちなのだ。自然は往々にして無気味さともなる。」⑦自然性と文化的影響の両者に関与しつつ、こうした遊びをするのだろうか。フロイトの意図したような双方の結節点は見出されないにしても、遊びの本来的な領域を照射し刺激するような二つの周辺領域が存在するということなのだろうか。

遊びが本能的衝動の排出口以上のものであることは前章で述べた。本章では、一方では子供の未来・目的指向的模倣によって、他方では親の文化指向的教育（保育）によって遊びの中にもたらされる剰余的価値を、その排出性に対置できるかどうか考えてみよう。つまり遊ぶ自由や創造性などが、その遊びの剰余的価値に内在しているのかという問題である。

前章の結びで、子供が形式を伴なう遊びをしようという時に、遊びは自然被拘束性を超えて現れてくるという結論に達した。その際子供は自ら形式を与えるという驚嘆すべき契機を通して、遊びを高次元へと展開させるようになる。しかしこのためには子供固有の操作、創造的な操作を要する。この創造性については、次に扱う伝統的でルールのある遊び（すでに定式化された形式をもってすすむ）に触れた後で再び論ずることとしよう。

（二）ルールにはさまれた遊び

ここでは遊びを規定している固定的な軌道の意味に注目して考えていく。つまり形式やルールに沿って流れてゆくような遊びである。小学一、二年頃の遊んだ思い出

に浮かぶ、例えば「オランダに一軒家」（＊日本の「かごめかごめ」のような歌）などの輪になってする遊びにおいては、そこに主題があろうとなかろうと歌に合わせて遊びの流れが規定されていたものだ。このような遊びには、私たち自身で考え出したわけではない形式やルールが前以てあり、それに喜んで従っていた。そればかりか、そういう遊びには何やら儀式めいた感じまであって、初めのうちはなんとなくおずおずと威儀を正し、畏敬の念のようなものを抱いて参加していた。期待されるべきものは形式・ルールによって確定していたにもかかわらず、輪になって一緒に遊ぶのはやはり、何か決定してしまっているものを期待する以上、ものが約束されている、ひとつの事件なのであった。何かしらびっくりするような事が起こるだろうという期待と、自分も今、そこに参加しているのだという思いに、胸をふくらませていた。小学校低学年児童や幼稚園の年長児にとって、皆で輪を作る伝統的遊びは、今だにいつも何か新しい何かを秘めた遊びである。子供同士の仲間を作るようになってまだ間もない頃だ。一緒に行動し、参加し、共同遊びができるという体験によって、子供は共存していることを感じながら期待をさらに押し広げる。こうした遊びのきまった流れを知ることは、導入的な事柄であると同時に、遊びを遊び共同体の中に位置づけるということでもある。もしルールが完全にではなく部分的にしか機能していないような不思議な遊びの輪があったとしたら、一体どれだけもちこたえられるだろうか。

年長の小学生が輪になって遊んでも、もはや秘密めいたものを感じとらないだろう。もうその遊びは終わったのだ。すでに子供は仲間の中に自分を位置づけており、仲間の中の自分の役割を担って遊ぼうとする[8]。ボールを使った遊び的循還性運動は、徐々に難しくなっていく一連の形式パターンを経て、より堅固な遊び形式へと変化している。例えばボールを投げ、壁に当ててはキャッチするにしても、次にキャッチする際には一度くるりと体を回してから……というように、難度を高めていくのである。ルールというものが遊びを次第に複雑なもの

にしている。そうしてルールは遊びを限定するのだが、そのルールの内側には不確実性が、つまり勝つか負けるかという蓋然性が存在する。ビー玉遊びの時、地面を仕切って引いてある線を踏んではいけないというルールがあっても、偶然そうしてしまうおそれはいつもある。子供は仲間の中に身を置き、遊び共同体が形成されている場において、勝負の蓋然性と共に遊んでいる。しかし遊びはルールをめぐってすすむのだろうか。そういうこともある。成長し小学校の最高学年にもなれば、ルールを監視するのは子供たち自身である。ルール作りや、尊重されるべきしっかりした約束事を決めるのに口げんかもして、多くの時間を費したものであった。自分達で作った秩序からなる小世界が、遊ぶ自由をかえって狭めて許容しないことも起こった⑨。それでも私たちは一人一人諸ルールの狭間にある遊びに意味や価値があることがわかっていたし、それを守らなければならなかった。かくれんぼの途中で、自分が「鬼」になっているのに家に帰ってしまう子供は、子供だった私たちの目には、誤まった遊び方をしているのだった。この「誤り」は単なるルール上の問題というより、遊び自体の侵害を意味していた。

ルールが遊びに制限を与え、結着さえつけねばならないという事実は、制限範囲内における諸可能性、蓋然性（チャンス）、不確実性などを排除するものではない。遊びが極端に複雑でなければ、遊びの約束事やルールが年かさの小学生によって牛耳られる必要も生じる。それでも、例えばある少年が一人よがりのルールをただ押し通してサッカーに加わるというのでは不十分である。彼も遊びに参与して、勝負のチャンスを共有して初めて「すてきな」遊びになることを理解しなければならないのだ。日常生活でも約束事は時間を守ることで支えられているだろう。しかし逆にルールを尊重して遊びから逸脱してしまうこともあり得る。たとえば分捕り品を介して遊ぶ場合。仲間から勝ち取ったビー玉を持ち去りたくても、分捕り品はもう一度遊びに使わなくてはならないんだという事を、他の子供が忘れさせない。遊びが分捕

り目当てになったり、ルールが特定の目的に結びついて固定的なものに化すと、遊びはルールによって維持されなくなる。年長の子供たちはルールの狭間にある遊びの価値に目が向くが、この場合、この位の年齢の子供であると、その態度や姿勢が大抵は（自分自身によってではなく）他律的に統制される必要がある⑩。

遊びは必ずしもルールによって進められていくわけではないから、ルール自体が遊びの実質的な部分であるというわけではなく、遊び自体―遊びのイメージ像―はやはり子供自身によって保持されていることは当然だ。ルールをあまりに固く守り過ぎると、ルールが遊びを阻害する周辺的領域になるという点を明確にしておく。遊びはルールに従って進むのではなく、ルールの狭間にあるものをめぐって展開するのである。

今度はルールが必然的な制限あるいは排出口を形成しているような遊びを見ていくことにしよう。同時に新たな問いが現れてくる。はたしてこういう遊びが十分に遊びと呼べるものなのかどうか。

（三）遊びの競争

子供も年かさになると、それほど複雑でなければ遊びのルールを把握し尊重することもできるが、競争的遊びをする時には、まだ大人の指示をありがたく利用する。こういう遊びでは子供はどうしても目的、利益（分捕り）成果などに関心を奪われがちになるのでルールが必要となるのである。また競争しようとする衝動が前面に強く押し出されることによって、遊ぶ自由の維持が困難になる。期待や驚きは、ここでは二つの周辺的領域にはさまれた狭い部分に起こる。すなわち一方には勝ちたいという自然的情熱という領域が、他方には勝負を筋道に沿って導くためのルール・約束事という領域が、遊びを展開させる期待や驚きなどの感情に隣接してあるのだ。それでは子供が競争的遊びに必要な態度や姿勢をとれない場合、大人が遊ぶ場を組織したりルールを決めたりすることを通して、遊ぶ自由を子供に保障してやれるのだろうか。

日常的世界が労働によって非常に機能的に統制されているため多くの時間が余り、技術革新が労働価値を低減させている現在、余暇の過ごし方には多くの関心が集まり、この傾向はますます増大していくだろう。この結果大人は子供の自由時間の利用法にも配慮しようとし、たとえば休暇のレクリェーションや近所の人達とのパーティなどを企画する。競争的遊びはそんなプランによく組み込まれるものだ。

こんなパーティでの遊びなどを眺めながら、特に遊ぶ自由に注目してみたい。子供たちは大抵、袋跳びやうさぎ跳び、スクーターボードやローラースケートの競争に勇んで参加している。しかし観察するうちに、見物人と、競争の参加者としてパーティに貢献している子供との間に、相違点のあることが思いあたる。まだ順番の回ってこない子供たちには驚きや期待のムードが充満しており、それは我が子に同伴し激励している親たちのまわりも同様である。彼らは見物人だ。彼等の前で遊びが行なわれているのだ[11]。彼等の眼前である出来事が遊び的ムードの中で起こっているのだ。しかし彼等は遊んでいない。なぜならアクティヴに参加していないからだ。遊びや遊ぶ自由についてこのレクリェーションを考察する気なら、参加している方の子供を観察すべきである。

自我の活動性を、参加しているどの子供にも認めることができる。少なくとも彼等は勝つために全身全霊を打ち込んでいる。マラソンやローラースケートで一等になる、というような目標に無関心でいられる子供がいるはずがない。しかしそういう目標は、勝負の蓋然性を含んだ遊びの場の内側にあるわけではない。遊びの場を組織するのは指導的立場にある大人だとはもはや言えまい。そこはすでに、参加者たちがただ勝利に向かって目的指向的になる競技場ではなくなっている。観客も時にそこに巻き込まれるが、やはり彼等にとっても競技は勝負のためだけの競争ではないのだ。観客も自分の情動を選手たちに投入し、緊張を共有し、遊びとしての競争に必要な解放感にはひたれずに息をのむ体験をしている。

競争的遊びは参加している子供にとっては、目的・利

益指向性の支配した非常に窮屈な場で繰り広げられている。期待や驚きがかもし出す雰囲気も、子供が競争的衝動から自分を解き放つことができなければ、何の効果も生み出せず、遊びが発展していかない。大人が競技の指導をするのはルールを順守させるためであるので、目的の成就や失望の敗北を見ないうちに遊びがおしまいになってしまえば、大人からどんな手も下すことはできない。遊ぶ態度や遊ぶ自由などを、その周辺領域であるルールを強化することによって組織することはできないのである⑫。

自然的諸傾向から見た子供の態度と、他者の模倣や目的指向性なしに遊ぶための自由は、自我の活動性と結びついている。そしてこの自我の活動性を、自我の創造的な志向性としても理解していかねばならない。子供が自分自身で喚起する形態・形式を伴って遊ぶことができる場合、このことは殊に明確になる。

さてここから、すでに触れた形式付与的な遊びへと深くアプローチしていけるだろう。

（つづく）

原註・参考文献（抄）

① J. CHATEAU, Le jeu de l'enfant, Paris, 1946.

② L. J. STONE & J. CHURCH, Childhood and adolescence, N. Y. 1966.

③ O. F. BOLLNOW, Neue Geborgenheit ボルノー『実存主義克服の問題—新しい被護性—』未来社

④ 遊び的循環性運動、第一章参照

⑤ 反復的運動を、第一章では循環的・円環的運動として考えた。

⑥ S. KUYPER, Enige aspecten van vrij en dwangmatig herhalen, Hilversum, 1963. カイパー『自由な、そして強迫的な反復の諸局面』 反復のゲシュタルトを三様に扱っている。1.前進的な時間の動きの中ですすみ、労働と共に起こる非固有的反復。2.発展的な特徴をもち（即興の如く）、より高次の水準に到達していく、遊び的循環における純粋な反復。3.閉じた循環系の中で、絶えず同一点に戻ってくる強迫観念的反復。

⑦ PIETER BRUEGEL D. Ä., in Orbis Pictus, Bnd 36, Hallweg Bern 1961.

⑧ この年齢の子供にとって自己確定は大きな役割を果たす。Chateau によれば自我の確認 L'affirmation du Moi は、一般的特徴とされているが、この見方とは反対に、我々はこの自己確定は遊びの発展とは対向しており、むしろ「自己を遊びの中に位置づける」ことの方がより本質的であると考える。

⑨ ルールには、不意に起こったりびっくりするような出来事にも動じない、強制的な性質がある。

⑩ 自我の活動認識 (kohnstamm) は自我の態度としてここでは理解されており、その自己確定が遊び共同体に共働するよう適応させる。これにはルールを知り、守るだけでは足りず、遊びに形やゲシュタルトを与えるような、子供のアクティヴな態度や構えも必要となる。

⑪ 遊びを直観的に考察していく際、意味付与する主体によって喚起されたのではない現象を、遊びの本質を究明する上での出発点とすることには批判的でありたい。現象と存在 existence とは区別されねばならない。遊びが遊んでいる主体にとって遊び世界でない限り、見物人の前で遊ばれているのだから、遊びと呼ばれているものはまだ遊びではないのだ。出来事として「遊んでいる」ということは、そこに能動的に関わっている人にとって遊びであるとは限らない。

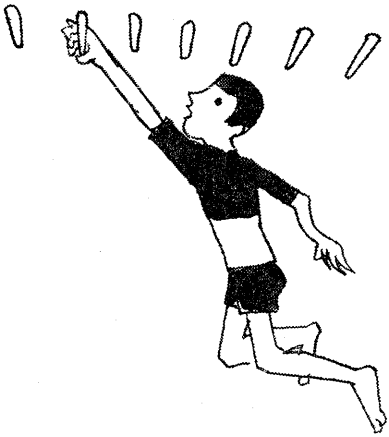
⑫ F. J. J. Buytendijik はサッカーにおける原始的、攻撃的要素に注目している。(Het voetballen, Utrecht, 1952.『サッカーするということ』) サッカーには周辺的領域の支配がよく起こり得ることを明らかにしている。そして遊びの自由がルールをきっちり守ることによってもたらされるのではなく、プレイヤーが自分で持ち込まねばならないことがわかる。

(お茶の水女子大学大学院)

『子どもへの愛』の社会学（1）

――子どもへの愛は本能か――

山田昌弘



1　子どもに対する愛の強調

「愛情のこもった教育」、この言葉ほど教育者や親として強調されるものはあるまい。また、この言葉ほど教育者や親にとって都合のよいものはない。子どもに暴力をふるったとしても、教育や親が行えば「愛のムチ」として許されてしまう。子どもに暴力をふるうのはどんな場合でも愛情から出たものではないと言い切る人もいるかもしれない。しかし、その人とて何が本当の愛情から出た行動なのかはっきり答えられるわけではあるまい。

「愛情のこもった教育」は、その内容の曖昧さのゆえに、言葉として一人歩きしている。

本稿は、愛情のこもった行動（教育、しつけ、世話など）に関する小論である。が、このような行動こそが愛情が真にこもっているといった類の事を主張するものではない。強いていえば、ある個人が、ある行動を「愛情がこもっている」と評価すれば、その行動はその人にとって愛情のこもった行動となる。個々人で、愛情のこもった行動は異なるという点から出発しなければならない。視点を一段上げてみよう。近代社会では、「愛情のこもった行動」が理想とされ言及される。それをめぐってのトラブルさえある。その事自体が問題にされるべきである。理想化される、言及される、トラブルとなるという事の意味を、歴史的、社会的に考察していこう。

2　愛情の社会学

今まで愛情という言葉を無造作に使ってきた。いったい、子どもに愛情を感じるとか愛情のこもった行動とはどのようなものであるのか。この問題は、情緒を感じる事、情緒的行動とは何かというもっと大きい問に行きつく。この点について考察してみよう。

従来、人間の情緒は、文学の対象であったけれども科学の対象ではなかった。情緒現象が人間の行動や、社会現象の理解にとって不可欠な事が認識されたのは、つい最近である。社会学では、情緒社会学という分野が確立しつつある。同じものに対しても、人によって感じる情緒が異なる。メロドラマを見て泣く人もいれば悲しくならない人もいる。高い所に上っても、恐怖を感じる人もいれば感じない人もいる。このような現象を解明するために、情緒社会学では「情緒規則」という概念を導入する。同じものをみても人によって感じる情緒が異なっている。それは、個々人が内面化している情緒規則が異なっているからだ。我々が子どもに愛情を感じるのは、子どもという対象に愛情を感じるという情緒規則を（多くの場合無意識的に）教え込まれたからだ。このように、ある対象に触れて（見る、聞く、考える、etc.）情緒規則

によって情緒が発生する過程を、情緒喚起過程と呼ぶ。一度、情緒が心の中に生じると、人は、特定の行動をしたいという気持にかられる。例えば、恐怖という情緒は逃避行動を、不安という情緒は警戒行動をとるように人々にしむける。愛情という情緒が他人に向かう場合、他人のために何かをしたいという気持が起きる。つまり、情緒は行動の動機づけとして働く。これを、情緒表出過程と呼ぶ。例えば、子どもに愛情を感じるから子どもの世話をしたくなるといった事が、情緒表出過程に当る。

情緒現象にはもう一つ別のレベルがある。我々は、人の行動を見た時、その行動に込められた情緒的意味を汲み取ろうとする。例えば、母親が子どもの世話をするのは、「愛情」があるからだとか、恋人が自分に微笑みかけるのは、「好き」だからなどという理由づけをしている。他人の行動だけでなく、自分の行動に対しても（事前もしくは事後の）理由づけを行なう。このように、行動に対してその情緒的理由を考える事を、情緒的意味付与という。この視点は、近代社会における子育てのあり方を考える場合、重要になってくる。子供への行動をめぐってトラブルが発生した場合、その行動が愛情から生じたと認定されれば、社会的にその行動は許されてしまう。例えば、子供の行く末を案じて親子心中をするなどというケースがこれに当る。逆に、自分では愛情からでたと意味付与しても、周囲から愛情がこもっていないと認定されれば、社会的に批難を受けることもある。

3　未開社会における子供への情緒の諸相

①　子供への愛のない社会

近代社会に住んでいる我々にとって、自分の子供への愛情、特に母性愛は、自然現象のように感じられる。それゆえ、「子供への愛情」という情緒規則の存在を意識することさえ難しい。未開社会の生活が文化人類学者によって明らかになるにつれ、子供への愛情は、決して自然なものではなく、文化によって造りだされるものだという事が分ってきた。

シャファーは、対照的な生活環境を持つ二つの民族の

例を挙げ、母性愛普遍説を批判している。イク族は、アフリカの不毛の地に住む民族である。ターンブルの報告によると「これらの人々の生活には、家族の情感や愛情のような楽しみの余地すらまったくなかった。子どもは、役に立たない余計なものとみなされ、三歳になると親の家から追い出された。子どもはそのときから、おとなからの援助や指導なしに、もちろん親の愛情や慈愛なしに自分で生きていかざるを得なかった。……子どもが火の中に落ちて火傷を負ったときのおとなの反応は、おもしろがることでしかなかった。……」（シャファー『母性のはたらき』p. 220）。一方、ニューギニアのムンドグモル族に関するマーガレット・ミードの報告によると「ここにも母性愛のようなものはまったくなかった。……赤ん坊は、生まれたときからずっと、子どもに対する強い嫌悪に満ちた社会の中に置かれているからである。……母親は子どもの身に起る病気や事故に対して、不きげんに憤慨しながら対応する。」（前掲書 p. 221）ミードによれば、愛情がない原因は、ムンドグモル族の生活の豊さにある。子どもは親の援助なしに育つ事ができる。シャファーが指摘している通り、二つの社会は「子どもへの愛情なしに」機能している。つまり、子供への愛情は、本能でも社会の存続のために不可欠なものでもない。

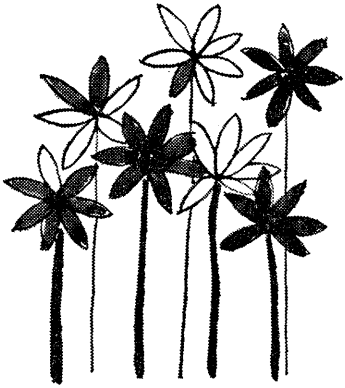
② 前近代社会における子どもへの愛のパターン

以上の二つの例は、極端にみえるかもしれない。すべての文化は平等だという立場に立てば、彼等の文化を異常として片付けるわけにはいかない。他の社会を見ても、子どもへの情緒規則は、我々の社会とは基本的な点で異なっている。

レヴィ＝ストロースは、膨大な未開民族の資料を調べ、子どもへの情緒態度に関する一つの法則を発見した。父親が子供に対し、厳しく敵対的な態度を持つ民族がある一方、優しく友好的な態度を持つ民族もある。一見、父親の子に対する情緒的態度は、民族によって恣意的に見える。しかし、母方叔父の子どもへの情緒的態度を加えてみると、子どもをめぐる情緒規則の構造がはっ

きりする。トロブリアンド島では、父と子のあいだの遠慮のない親密さ、甥と母方のおじとの著しい対立が見られる。ニューギニアのクトップ族では、父と子のこれほど親密な結びつきは見たことがないと評される一方、畏怖のニュアンスを帯びた甥と母方おじの関係がある。コーカサスでは、父と子のあいだに対立関係がある反面、母方おじは甥に優しくする。トンガでも、父と子はなれなれしくてはいけないものとされ、甥と母方おじは気のおけぬ関係にある。要するに、子供にとって父が優しければ母方おじが厳しく、母方おじが優しければ父が厳しいという相補う関係が成立している。(レヴィ＝ストロース『構造人類学』)

以上の例ほどはっきりしていなくても、子どもに対して愛着を感じ、気安く接する相手と、子どもに対して権威的に接する相手が分離している社会は多い。精神分析学者マーク・ポスターは、子どもに愛情をもって接する人と権威をもって接する人が分離している事は、子どもの心理的安定にとってプラスであると述べている。子は、ある人はこわくある人は優しいという事があらかじめ分っているので、どのような態度をとるにしろ、不安になる事はない。(Poster 'Critical Theory of the Family')



近代社会では見られないが、近代社会では一般的な子どもに対する情緒規則の性格をもう一つ示そう。有名な女性文化人類学者であるマーガレット・ミードのサモア社会の報告をみてみよう。サモアでは、子供に対する権威が分散している。親を含む親族集団の誰もが子供をしつけ、働かせる権利を持つ。子供の方は、親の家が気にいらなければ「より気楽な親戚の家に移り住める」。（M・ミード『サモアの思春期』）日本でも、少し時代を遡れば、オジやオバ、近所の人など、自分の子供以外の子供に情緒的に係わり、権威的、もしくは、愛情のこもった態度で子供に接していた。前近代社会では、このように情緒的関係をとり結ぶ人物が多数存在するのが一般的だ。自分の子どもだから愛情を持つとか自分の子どもだから叱るという感覚が相対的に薄い。子供と親は相互に情緒的に縛られる事がないため「人間関係が過度に緊張する事がない。」（ミード）

③　近代社会の特殊性

前近代社会を概観してみると、我々の社会における子供への情緒的態度がきわめて特殊なものではないかという疑問が生じる。多くの前近代社会では、1.　子供に対する情緒的分業が行われている。子供に対し権威的に接ししつけを行う人間と子供に対し愛情を持って接し気安い関係を作る人間が分離している。2.　子供に対し情緒的に係わる人間が多数存在する。それに対し、我々の社会では、1　子どもと一人の大人との間に権威と愛情という正反対の情緒的態度が存在する。2　父母など少数者に子どもとの情緒関係が限定されている。

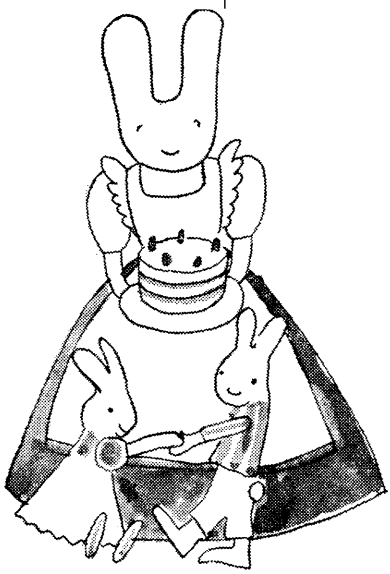
次回では、近代社会の成立と共に、子どもに対する情緒的態度が変容していく過程を解説する。

（東京学芸大学）

我が家の朝

――父親の記録を通して――

はるにれの会
宮里睦美



朝、私が台所で少々あわてながら食事を作っている。トットットットコ、とちょっとねむそうな足音がきこえる。どうやら目がさめた息子が母はいずこと起きだしたようだ。こうなると、あとは殺人的忙しさにかわる。

「おしっこ！」

「だっこ！」

「ぎゅうにゅ！」

と、要求は矢継早にくる。その合い間にみそ汁をかきまし、お弁当をつめる。

もともと早起きをした日ならば、それでも余裕をもって一緒に食事もできるが、一家でねぼうをした日など、ほとんど走り回って用事をすませ、私は出勤ということになるのです。あとに残るのは父親と息子の二人。勤務先が私よりぐっと近い彼は、私の出かけた後、息子に食事をさせ保育園に送り、自分も出勤するという離れ技をこれから演じるのです。

パンツをはかない、といって逃げまわったり、さて行こうという時になってウンチをしたり、お気に入りのお

もちゃを持っていくといって大泣きをしたり……その苦労は並大抵のものではないようです。

けれどその一方で、この朝のひとときは、父親と息子が二人きりですごす唯一の時間でもあるのです。彼は、その中でずいぶんよく息子のようすをみています。そして時折、そこでの発見を保育園への連絡ノートに記しています。そこに書かれた記録のいくつかを通して、我が家の朝――父親・息子・母親――を紹介したいと思います。

(1) のどかな朝

――朝、ふとんの中で大きな声で歌をうたってくつろいでいるK。朝食のうどんをもって、ブラブラさせ歌をうたっている。子どもの生活には、いつも歌がある。だからしあわせもいっぱい。大人も大切にしたい。

（一歳八ヶ月）――

――父がひげをそって戻ると、さっきまで遊んでいた部屋から姿が見えない。あわてて捜すと、ふとんの中にたくさんの人形を持ち込んでねている。みつけるとニコリと笑う。

（一歳九ヶ月）――

同じ人間で同じ家庭で、昨日も今日も同じになってもおかしくはない朝なのに、朝の調子というのは、その日によって大きくちがう。目がさめたあともしばらくふとんの中でゴロゴロして歌ったり、おもちゃをいじったりしているような時は、調子のいい時。

そんな時は、大あわての大人のリズムもふとなごみ、深く息を吸い、ほほえみをかわせる。特に私は、立ち去っていく身の上。せめて別れの前のひととき、のどかさを演じたいと思うけれど、なかなか上手くいかないのも現実です。

(2) 涙・涙・涙の朝

――朝食の時、なにかが気にくわないのか大泣きする。せきこむほどの泣き方なので母親がだいてベランダから外を見せに出た。戻ってきて牛乳を飲み、ようやく落ち着く。どうやら自分で食べたいのだがうまく食べられな

かったのが原因のようだ。泣きながら母親から離れ自分の席にすわりたいと意志表示するK。人間としての誇りが生まれつつあるのだろう。落ち着いて一人で食事をしだすと、どんどんきげんがよくなって、色々話をしながら食べている。流れる音楽に体をゆらせ、ごはんを机いっぱいにまきながら食べるK。ベートーベンの音楽には合わない食べ方だなあ。前衛だよと彼は言う。

（一歳三ヶ月）——

——ウンチをしてパンツをとりかえる時、いつものようにとてもいやがりパンツを離さない。脱がせかけたのをまたはこうとする。プライドがあるのだろうか。それとも気づかぬうちにどこかでトラウマ（心の傷）を与えてしまったのだろうか。「いいよ、いいんだよ」と言って無理やり脱がせふいてやる。とても怒っているが、そのあと「けいご、えらいねえ」と言ってたくさんキスをすると、ケラケラ笑ってきげんが戻る。ふとんをあげるのを手伝ってくれる。

（一歳七ヶ月）——

涙には、いつも訳がある。わかる時もあればわからない時もある。ただ、流れ続ける涙の様は、常に変わらない。

Kの涙は、時に、成長するがゆえに流れることがある。自分で食べたいけれど食べれないといって泣き、パンツの中でしたウンチを何らかの形で意識できるようになった彼は、それ故に泣く。ズボンを自分ではきたくなってきたころも大変だった。はきたいけれどはけないといって泣き、そばから誰かが手を出したといって泣く。それはもう、手のつけようのない事態といえる。

彼は、このために、何回時間休をとったことだろう。朝は、Kの成長したいという願望につきあっていられる余裕など少しもないのに、このやさしき父親は、ひたすら待つのです。そして気分転換のきっかけをみつけ、上きげんの世界へKを連れていってあげている。せっかちな私は、いつも教えられている。

——母が早くでかけるので「チュ」して「握手」して「バイバイ」したのであるが、しばらくして、食事の準

備を父がはじめると、「ママ」「ママ」と、母でなくてはダメと訴える。しばらく泣きやまない。

（一歳九ヶ月）——

——母が出かける時起きたので（ドアのしまる音）「ママ」「ママ・ママ」と言って泣きだしてとまらない。「おんも、おんも」「ママ・ママ」をくり返す。食事もなかなかできなかった。タイミングはむずかしい。

（一歳十ヶ月）——

——一定の別れの儀式をして（握手をして、チュをして、バイバイする）自分を納得させるようになってきたようです。お母さんとはそのすべてのパターンをとれば、うまくいってらっしゃいができるようです。そしておもちゃとはチュをして別れます。昨日はほとんど全てのおもちゃとチュをしていたのでそれだけで五分近くかかりました。

（一歳十一ヶ月）——

「おかあさん行っちゃダメ！」

Kの泣き声が、ほとんど言葉にきこえてくる。どうやってもダメだった時期をすぎて、一歳九ヶ月ころには、上手に別れられるようになってきた。泣きそうになっても、「それじゃあ、牛乳を一緒に飲もうね」と言って、私が牛乳を注ぐと、うれしそうに飲む。Kは、父親が牛乳を注ごうとすると「ママが！」と言って泣いた。誰が注ぐかが、とても重要になる。大人は、そんな感性をもう持ってはいないけれど、Kのような子どもは、牛乳を注ぐ手に、おっぱいを見ているのかもしれない。最近Kは（二歳三ヶ月）、あかちゃんごっこを楽しんでいる。私を赤ちゃんにし、自分が母親になる。そして「おいでおいで」と手を出したり「かいしゃいくの」と行くまねをしたりする。そして「ないて」と、私に要求する。私が「エーンエーン」と泣くと、走ってきて「どしたの。だいじょぶよ」と言う。Kは、くりかえされた朝の別れの印象を遊んでいる。

(3) 遊んで、そして発見の朝

——以前バラバラにしたスライドを、またもとに戻そうといろいろやっている。（フィルムをマウントからはず

してしまったのだがそれをまたマウントに入れようとしている。）当然できるわけがないのだが、だめだと今度はスライドをけとばしている。笛を吹いて気をまぎらし、今度は、おなかの中（服の中）にスライドをつめこんでいる。

（一歳八ヶ月）――

――テーブルのつなぎ部分にトランプを入れるのを覚える。テーブルでくつろいでいると、下から突然トランプがでてきて驚かされてしまう。いたずらもたくみさを増してきた。

（一歳九ヶ月）――

人間にはいろいろなタイプがあり、それはごく小さいころからいろいろな形であらわれているのではないか、と思う。

Kは、どっかと坐りこんで小さなものをいじりまわすのを好んでいる。だから、身の回りの思いもかけないものが、Kにとっては格好の遊び道具になる。

スライドは、まさに好みのものだった。透明のケースに入ったカタカタ鳴るもの。「何だろう」という顔で手を伸ばす。（Kの熱意に負け、もう使わなくなったスライドを一箱Kに渡す）ふたを取り、バーッと散らす。いじくりまわすうちに中のフィルムがはずれる。はずれる、ということがわかった時のKの驚き。そしてさっそく、全てのフィルムをはずしだす。少し口をとがらせて、本当に真剣にやり続ける。

――あさりのみそ汁を作っているなべの中、モクモクと白いあわの立っているのを見て、「クモ、クモ」と言う。母がすくって捨てると、「クモは、クモみせてえ」と何度も言う。「クモはもう空にいっちゃったよ」と言っても「クモ、クモ」……。「じゃあ空を見に行こうか、雲あるかなあ」そして外に出ると、雲一つない快晴。「クモとってえ……」

空に浮かぶ雲が、家のナベの中にあらわれ、身近なものになったのだから、彼にとっては、またとないチャンスだったのだろう。だがKよ、雲は、やはり人間には手の届かないものなのだ。

食べ物や様々なものの中にニャンニャンを見たり、コ

ッコ・ゾウ・クマを見るK。アイスクリームにニャンニャンをみつけなかなか食べられなかった時もあった。想像というにはあまりにも自然に見てしまう子ども。このなにげなさに、驚きとすばらしさを感じる。

（一歳十一ヶ月）——

あさりのみそ汁の中のクモは、私自身、捨ててしまったあと、あ！　と思った。モクモクとできていたあわは、たしかにすてきな雲だったのだから。

それにしても、空は、子どもにとってどんな印象のものなのだろう。

三月の末、思いがけず降った春の雪が、保育園から帰る時になると、驚くほどさっぱりと消えていた。母にだっこされながら家へむかうKがびっくりしてつぶやいた。

「ゆき、きーちゃったねえ。ゆき、きーちゃった」

「本当だね、すっかり雪が消えちゃったね」

「ゆき、おそら、かえったの」

そんなことを話しながら、しみじみ空をみた。遠くを飛ぶ飛行機をみつけたKは「ちいさいひこうき！」と言う。住宅に隠れみえなくなると「ひこうきみせてー」と言う。

ある時は、風に吹かれ、雲が次々に流れていくのを見た。びっくりするほどの早さで流れていた。

「ゾウさん、バイバイ！」

「いっちゃった—」

Kと一緒にいると、私は、もう一度子ども時代を味わえるような気がする。驚きと発見に満ちたあの時代を……。

(4)　二人三脚の朝

——さあ、ごはんにしようと座卓を出すと、自分で気をきかせてダイニングテーブルからパンの皿やたまごの皿を運びだした。イスをもってくると、そこに坐ってパンを食べはじめる。はじめは、ぶどうパンのぶどうをほじくり食べていたが、だんだんムシャムシャと食べだした。あまり食べない目玉焼きも、スプーンで食べ、一度

ペッとするが、その後手でベタベタと食べだす。

（一歳七ヶ月）——

——連絡帳をもって家じゅうを逃げまわり書かせてくれない。自分が書くといってぐちゃぐちゃにしてしまう。（このページ一面にぐちゃぐちゃが書いてある。）

（一歳八ヶ月）——

——朝、父をおこそうとしてか、ふとんをろうかまで引っぱっていってしまう。すごい力だ。

（一歳九ヶ月）——

——シャケの皮を食べるので父が気持ち悪がったら、ケラケラいって笑っていた。

（一歳九ヶ月）——

父親とKの朝の風景は、私に音楽を想像させる。二つ（父親とK）ともなくてはならないメロディーで、ある時は軽やかに、又ある時は激しく、又静かに、独特のハーモニーをつくりながら流れている。それにしても、あわただしいはずの朝なのに、しっかりハーモニーをつくりだしている父親に、私は感心せざるを得ない。

父親とKの二人三脚ぶりに触れ、私は少しうらやましい気持ちになる。だって、私とKは、二人三脚になる時もあるけれど、しっかりダッコや黙ってついてきて式の二人三脚になる時が多いから……。

これは反省すべきことかもしれない。

それとも、私が母であるためか……。

「我が家の朝」を書いている。今は夜中。さて、明日の朝は、どんな朝になるでしょう。ふとんの中で、ニッコリ笑って目ざめの合図をかわせる朝であることを期待して！

訂正　六月号30P上の段「中継」→「中断」、31P下の段「何度もけった」→「何度もかけた」

子どもの自己実現と保育者の自己実現

津守　真

三歳のK男は、朝、門から庭にはいるとすぐに、目の前にあった大きなれんがを両手で持ち上げ、真直にホールに向って二十メートルほども歩いて、れんがを溝の中に投げこんだ。三歳の子どもの力には余るほどの重い物を両手で運んで歩いたことに私は驚いた。れんがを溝の中に入れるとK男は再び門まで引き返し、もう一個のれんがを同様にして運んできた。

これは登園してすぐのことで、K男は学校に来たら何かを力を出してやろうと思ってきたに違いない。そして最初に目についた物に

挑戦した。

重い物を持ち上げて歩く感覚を思い出してみると、そのとき人は一点に自己の精神を集中させている。この感覚は、人間にとって重要である。気持が散漫なときにはできない。

この身体感覚は、大人が仕事をするときの精神の集中力と似ている。大人は、自己の世界の諸条件がととのって、うまくはたらき合うようになったときに、力を出して仕事をすることができる。大人の仕事には、いろいろの報酬や評価が伴うが、力を出した感覚が得られないと、その仕事はむなしさを感じさせるのではないだろうか。労働はそれ自体がよろこびである。そう考えると、子どもが重い物を持ち上げて歩くというのは、たとえそれが何の役にも立たないように見えても、大人の仕事の原型である。

朝、門をはいってきたときに、直ちに目にとまった物を両手で持ち上げた子どもにとって、外界の物は、彼の自己実現に挑戦するものとしてあらわれている。内的生命力を育くまれている子どもにとって、外界は、自分が何事かをなしてゆくものとして輝やいて見えるであろう。

環境や教材をそろえておくことは、たいせつである。しかし、保育者にとってそれ以上にたいせつなのは、子どもの内的生命力を育てることである。そうすれば、どんなところにも子どもは興味を発見するし、それがなければ、どんなに教材や活動が豊富に準備されても、それらは子どもの自己実現の活動の中に組みこまれない。

力を出して何事かをする体験が、人間の底辺にある自己実現の要求を形成するのであると思う。

幼児初期の自己実現の体験は、生涯を通しての人間形成の基礎である。しかし、成人後の社会的仕事は、個人の自己実現の断念とすら見えることがある。社会的仕事は、個人の野心の道具ではないからである。少し飛躍することになるが、この点について、丁度数日前に出版された一冊の書物から考えてみたい。

北川台輔著「一世と二世」のこと*

この書物の主題は、米国の日系移民の一世と二世についてであり、とくに、第二次世界大戦中に、日系人である故に、それぞれの開拓した土地から追われて、強制収容所に集められたそのときの牧

師としての体験である。著者の北川台輔氏は、私が若いとき、米国留学時代に、多くのことを教えられた師である。書物は、米国人に対して、日系人の苦労とその立場を訴えたものであるが、更にそれを越えてすべての人間をひとしく人間として見るヒューマニズムを基盤として、その人々と生活を共にした体験からの人間理解が述べられている。著者は、すでに、一九七〇年にスイスで客死されたが、実に実質的に、米国と日本との橋渡しをされた。国際人としての日本人である。

このように書くと、故人について記す賛辞のようになってしまうが、実のところ、私はこの書物の翻訳を最近になって読むまでは、戦時中の日系人強制収容所についてほとんど知らなかったし、北川台輔氏が、かくも深くそのことに関与しておられたことも知らなかった。私が知っていた著者は、異国の地で、私が相談ごとがあって訪ねたときも、たえず忙しく書類を整理しながら、訥々と、ユーモアをまじえて根本をついた考えを示された人である。

米国人もまた、この人の言うことなら本当だと耳を傾ける。そういう人であった。戦後直後、後の副大統領で民主党のハンフリーがミネアポリス市長のとき、市長の諮問機関である人種問題委員会

で、北川台輔氏は日本人でありながら委員長であった。私が留学当時、米兵と結婚した日本婦人の懇談会を開いたり、都会に憧れて出てきて問題を起しているアメリカインディアンの若者たちの相談にのったり、日系人のみでなく、さまざまな人の世話役であった。聖公会の牧師である氏が、日曜日に、説教壇から、がっしりとした骨組の話をされたときには、本来は学者肌の人であることを思わされた。私共留学生に対しては、人間として互いに信頼できる友人をつくることが、人種国籍をこえて必要であり、可能であることを、折にふれて教えられた。

今回、翻訳出版された書物を読み、氏がどのような体験から、異人種のかけ橋として生涯を終ることになったのかをはじめて知った。序章に次のように記されている。

「そのような事態のもとで、一人の人間に出来ることは一体何であろうか。その瞬間から、私の人生は私自身のものであることを停止してしまった。なぜなら、私は何百人というこの地域に住む日本人の家族の友として、同時に日本人社会と他のアメリカを構成する人種社会との間の調整役としての仕事に投げこまれたからだった。」(p.18—19)

そのような事態とは、一九四一年十二月七日の真珠湾攻撃以来、それまで平和な農村であった日本人社会が、敵国人として困難な事態に直面したことである。日常接している人々の困窮が、ひとりの人の人生の展望を全く変えて、違う人生を生きはじめるに至ることを示す好例である。しかもその全体は、人間に対する深い信頼によって貫かれている。そのことは次のように記される。

「私自身については一つのことが言える。この起りつつあったすべての事件にもかかわらず、私はアメリカ人の公明正大さと正義について信念をもっていた。私の心の奥深く、アメリカ人が日本人に苦痛を与えようとたくらんだりはしないという確信があった。」(p.66)

この自分と友人に対する揺がない信頼が、これから後の異人種間の調整役としての北川台輔氏の仕事の根底をなしている。ここではこれ以上詳しく述べる余裕がないが、この時代に生きた稀有な人の生涯を、この書物に見ることができる。

この書物の著者は、多くの人の証言によると、幼少時に人一倍やんちゃで、いたずら坊主であったという。すなわち、外界に挑戦して自らの力を出し、自己実現する体験を多く積んでいたのだと思

う。そのことが、自分に対する確信と、他者への共感と、他人への信頼の基礎をつくっている。自己放棄とみえることが、真の自己実現への道となっているのを見る。

保育の場合を考えても保育者の仕事は、子どもの要求に応答するのに忙しく、自分の自由が少なく見える仕事である。それだから、保育者はときに苛立つ。けれども根本に立ち返るならば保育者は、子どもの自己実現に力をかすことによって、自分自身の心の底の要求は何であるかを考え直し、そして、子どもにも自分にも共通の、人間としての真の要求に目をとめることができる。それに応答するのが保育の実践だから、保育者の生活には、広い意味での自己実現のよろこびがあるのだと思う。

＊北川台輔「一世と二世—強制収容所の日々」(伊達安子訳　聖公会出版　東京都新宿区小川町9—5)

(愛育養護学校)

幼児の教育　第八十五巻　第八号
八月号　©　定価　四〇〇円

昭和六十一年七月二十五日　印刷
昭和六十一年八月　一　日　発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本　田　和　子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

東京都千代田区小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九—一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

＊万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

筒井敬介童話全集 全12巻

ナンセンス・テールからシリアス・ストーリー

現代ものから時代ものと

多彩を極める筒井童話の集大成

定価各1,300円

名作「かちかち山のすぐそばで」など、数々の傑作を世に送り出している著者の作品を集大成しました。時代を活写する筒井童話の魅力がいっぱいです。その業績に対し、著者はこの度紫綬褒章を受けました。

第1巻　べ　え　く　ん
第2巻　とらおおかみのくる村で
第3巻　日曜日のパンツ
第4巻　かちかち山のすぐそばで
第5巻　おねえさんといっしょ
第6巻　じんじろべえ
第7巻　二人ともパンのにおい
第8巻　動物はみんな先生
第9巻　コルプス先生汽車へのる
第10巻　おしくらまんじゅう
第11巻　げらっくすノート
第12巻　ちゃんめら子平次

くわしくはフレーベル館代理店、特約店、支社、支店、営業所または本社営業部(03)292-7783㈹にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

昭和六十一年八月一日発行（毎月一回一日発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可　幼児の教育　第八十五巻　第八号

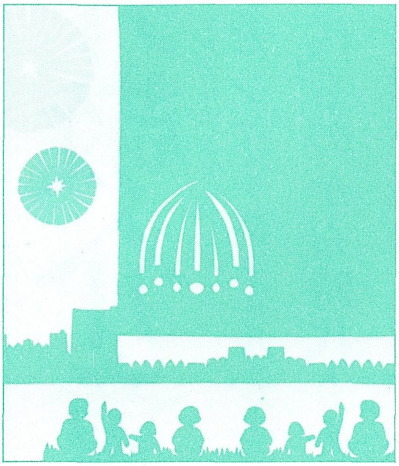
保育が楽しくなる

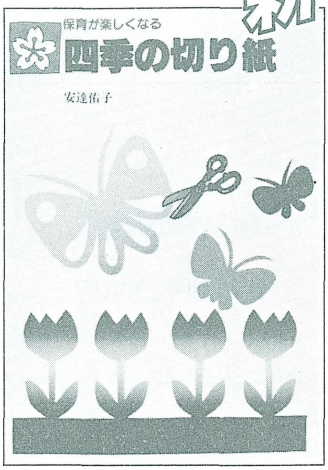
四季の切り紙

安達佑子・著　B５判・128頁・定価1,600円

新刊!!

絵で見てすぐに教えられる切り紙指導の入門書





- 切り紙は、子供たちに指先を使って物を作ることを体験させ、さらに知的発達を促す効果も大きい、理想的な製作遊びです。また、その季節に題材した切り紙で保育室を飾って、いっそう明るい雰囲気を盛り上げるのも楽しいものですね。
- 本書は、〈花火〉〈赤とんぼ〉〈雪〉〈ひなまつり〉などなど、四季折々のテーマごとに作り方のポイント／ヒント／作品の飾り方を解説した切り絵指導の入門書です。イラストを豊富に使った解説は、紙工作にまだあまり慣れていない方にもわかりやすく、また題材もかんたんにできるもので構成しました。
- 資料として、切り絵の歴史、切り絵の基本的な理論、子供たちに初歩から指導していく際の具体的な方法なども備え、切り絵研究・指導者として現在活躍中の著者の知識と経験が全編に込められております。

内　容

四季の切り紙

- さくら
- チューリップ
- ちょうちょ
- こいのぼり
- しゃぼん玉
- あじさい
- 海
- 花火
- 赤とんぼ
- クリスマス
- 雪
- ひなまつり

紙の折り方

各折り方の説明とその作品

資料編

切り紙の歴史と生活とのつながり
折った角度・面の数
多角形のつくり方
指導の実際

〈わしく〉はフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

昭和四十二年